

[第12回]

血液は渦巻く—“ダ・ヴィンチ-北斎”が 視線の地平に描いた生命エネルギーとその表現型

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科システム血拴制御学

Ikuro Maruyama 丸山征郎

福岡伸一氏をご承知のように、当代随一の生物に関するエッセイの書き手である。たくさん読んだわけではないが、私の好きな科学エッセイストの一人である。全く独自の、予想もしない視点からの切り込みが鋭いからであるが、それだけではなく、その切り口に、そこはかとなないロマンの香りが漂うところが好きである。

2015年5月31日、厚労省の班会議を終えて、帰りの空港のラウンジでほっと一息つきながら、朝日や毎日などの新聞の日曜書評欄に眼を通し終えて、次に日経新聞をみていたら、「芸術と科学のあいだ」という福岡氏のエッセイに気付いた。第68回と書いてあるので、随分古くからの連載なのだろうか？ それとも数人によるリレーエッセイか？ などと思いながら眼を通した。

“渦に生命の本質をみた北斎”

福岡氏は、このエッセイで、信州・小布施町の「北斎館」を訪れて、葛飾北斎の「怒濤」の「男浪、女浪」を観た。北斎はなんと、80歳になってからこの小村に旅し、ここに住み着いたのだという。福岡氏は、

この「怒濤. 男浪, 女浪」(図1)に圧倒される。そして記す。

「……もはや空も雲もなく、ただ波が宇宙的深遠さをもって音もなく渦巻いている。絵をまえに佇むと見えてくるものがある。らせん状に逆巻く水流がそのエネルギーを失うことなく、次のらせんに手渡され、連続と引き継がれる。

北斎は知っていた。これこそが生命の本質で、生きることの実相だと。渦は左右心房の特殊な形状から生まれ、血流の渦は、らせんのエネルギーを保ったまま進む。らせんのきつ先はあらゆる分岐路、いかなる隘路にも飛び込んで行く。私たちの身体は、潤され、生かされている」と(下線：筆者)。

血流は“渦巻くか？”

“手のひらを太陽に透かしてみれば 真っ赤に流れる 僕の血潮…”

という学童が元氣よく歌う唱歌がある(やなせたかし作詞/いずみたく作曲)。確かに手のひらを太陽に透かしてみれば、手は赤くみえる。さすがに血管は見え